



馬場 元毅(著)

『脳神経症候イラストブック』

東京労災病院院長・日本医科大学名誉教授

寺本 明

世の中には優れた臨床家、優れた外科医は数多い。一方、世の中には絵の好きな人、上手な人もたくさんいる。しかし、この両者を兼ね備えた人、つまり絵心を持った外科のエキスパートとなると、かなり限られてくる。さらには、教育熱心で、その絵の才能を臨床教育に生かしてあげようとする人となると、ごく一握りである。筆者の知る限り、そういう人はわが国の脳神経外科医の中には数人しかいない。その一人が本書の著者である馬場元毅先生である。

馬場先生は、大学病院や市中病院で45年にわたる臨床経験を積んでこられた。その経験をもとに、これまでもイラストをふんだんに取り入れた神経学や、その解剖の教科書を数冊出版してこられた実績がある。それらを踏まえて、この度、学研メディカル秀潤社から『脳神経症候イラストブック』を上梓された。

一般に、物事は頭の中でわかっていても、適切な文章にできないことがある。逆に言うと、文章にすると自分自身も論理が整理されて理解が深まる。これは、イラストについても大いに言えることである。絵でもって、ある事象を正確に伝えようとすることは容易ではない。しかし、それができた時には、他者の理解は言葉や文章をはるかに超えて伝わるものである。イラストが目から訴えるインパクトは大きい。

エキスパートが描くイラストは、写真やビデオからは得られない、臨床医の心あるいは長年の経験から獲得した真髄(スピリット)を表現することができる。たとえば、手術のイラストでいえば、術中写真ではその段階で直接見えない構造も、書き添えることができる。術者の得た深い経験や想いを込めながら、重要性のメリハリが描出されるのである。すなわち、本書には馬場先生の伝えたい想いと工夫が、随所に散りばめられている。

神経学は医学生から見ると、とっつきが悪いとよく言われる。確かに、難解な用語と解剖図を見せられると、興味がわかないのももっともである。しかし、ひとたび神経解剖の基本的な知識が入れば、神経学ほど論理的でわかりやすい臨床分野はないと思われる。そのとっつきの悪さを本書は解決してくれる。

そのため本書は、神経学を学ぼうとする医学生、もう一度きちんと学び直したい研修医や一般臨床医にとって最善の手引き書である。基本的に各項目が見開きあるいは単ページで完結の形になっていることも読者としては便利である。

一般臨床医をはじめ広く医療従事者に、神経診断学の手引き書としてお勧めする次第である。

● B5 / 頁 176 / 2015 年 / 定価：本体 2,800 円 + 税 /
学研メディカル秀潤社刊